

はじめに

国語教育は授業という場所に立ち現れる。授業は国語教育の行なわれる最もベーシックな場所である。国語教育学の最も重要な特色は、「学」の内容が常に教育現場における教育実践と不可分の関係にあるという点にある。その教育実践の中核に授業がある。理論研究や歴史研究の重要性を視野に収めつつも、授業という場所に直接つながる実践の学として国語教育学を位置付けたい。このことから、本研究では「国語教育」という用語を広義に用いて、「学」としての要素と「教育実践」としての要素をそれぞれ組み込んだ用語として使用することにする。

国語教育の第一の目標は、明日の国語科の授業をよりよいものにするることである。そのために今日の授業をしっかりととらえ直し、様々な側面から考察を加えなければならない。授業研究の目的はよりよい授業創りにある。比喩的に述べるなら、それは授業そのものをテキストとしての的確に読むということである。そして授業研究は、閉ざされる方向ではなく、開かれた方向に進む必要がある。それはまさしく授業開発という方向である。

授業開発の際に配慮しなければならないことは、まず教材開発という課題である。教科書に採録された教材のみに依拠することなく、効果的な授業を実践するために、自主的な教材開発を推進しなければならない。学習者に身近な場所からも様々な素材を意欲的に発掘して、教材化の可能性を追求する必要がある。授業の目標が明確になれば、その目標に即した教材開発の方向は絞られることになる。漫画、アニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話など、いわゆる「サブカルチャー」に分類される素材の中にも、国語科の教材として成立するぎりぎりの境界線上に置くことができるものがある。本研究ではそれらの「サブカルチャー教材」を「境界線上の教材」として把握してみたい。

教材開発のための重要な観点として、学習者の興味・関心の喚起という要素がある。一人ひとりの学習者にとって、いかに興味・関心のある教材が提供できるかという点に、授業の成否がかかっている。決して授業のための授業でも、試験のための授業でもない、彼らの日常のことばの活動に直接つなげるための教材開発を目指す必要がある。

教材開発とともに、実際の授業をどのように構想し実践するかという点もきわめて重要な課題である。わたくしは教材開発力と授業構想力を、教師の最も基本的な力量としてとらえている。効果的な教材を発掘したら、教師の中にそれをういた授業のイメージが構築されなければならない。一時間の授業展開に関する具体的なシミュレーションを思い描くことができれば、それを実際の授業に応用することはさほど困難ではない。教師には、常に多彩な授業構想を展開できるだけの力量が求められる。

わたくしは授業構想をもとにして、「研究の手引き」と称するプリントを毎回作成することにしてしている。それは授業における研究テーマや目標などを掲げ、その授業をどのように展開するかを具体的に紹介したレジュメである。一方で、「授業レポート」と称するワークシートを作成して、学習者が授業中に「研究の手引き」に対応した記録ができるように配慮している。学習者は「研究の手引き」に即して授業を受け、教師の説明や自分の考えなどを「授業レポート」に具体的に記録する。また「授業レポート」には、「本日のひとことメモ」という欄を設けておいて、彼らが授業中に感じたことや考えたことなどを自由に記

述できるようにしておく。「授業レポート」は毎時間回収して点検し、次の時間に返却する。なお授業時に用いる教材は、「研究資料」として印刷・配布する。学習者は授業時に配布されるこれらの資料を整理してファイル・ストックするが、それは後でポートフォリオ評価として使用することもできる。

この方法は、わたくしが中学校・高等学校の現場で授業を担当したころから始めたものだが、大学の授業でも導入している。毎時間の事前準備とアフターケアに多くの時間を費やすことになるが、教師の負担相応の効果を挙げてくれるので、いまもなお、常に改訂を重ねつつ継続して用いている。特に「授業レポート」に関しては、学習者の現実をそのまま把握することができるという利点がある。彼らの記録が十分にできていない箇所や誤った記述が多く見られるような箇所があると、それは教師側の説明が好ましくなかった箇所だということが明らかになり、自主的に改善に向けての努力をすることができる。さらに「ひとことメモ」欄に書かれた多様なメッセージから、学習者の内なる現実を引き出すことができる。教師の側にとって多くの負荷が強いられる試みではあるが、これからも継続して授業に取り入れたいと考えている。

国語科の授業で特に重要なことは、学習者の具体的な活動を充実させるということである。いくら効果的な読解や作文の方法について指導を徹底しても、実際に読んだり書いたりする活動がなければ学習の効果はない。具体的なことばの活動を授業中に展開することが大切である。そして、活動を通してどのようなことばの力を育成するかという点が、授業構想の基盤になければならない。

新たな授業開発に向けて授業というテキストを読む行為は、心楽しい営みである。「楽しく、力のつく」授業創りを目指す教師にとって、授業研究は大切な出発点になる。そしてよりよい授業の実現を目指して様々な工夫を重ねることもまた、とても楽しく充実した時間である。この楽しい循環こそが、国語教育研究の基底にある。

中学校・高等学校の現場で国語教育を担当して、30年に及ぶ歳月が流れた。2002年度から所属は大学に移ったが、教材開発および授業開発に関する思いには共通したものがある。さらに2004年度から4年間、管理職という立場ではあるが小学校の教育現場に勤務する経験を積んだことから、小学校から大学院に至る広い校種の学習者とともに学ぶ機会に恵まれた。本研究は、これまで33年間に及ぶ国語教育実践の総括として、具体的な授業における実践に即した研究を展開する。

サブカルチャー教材を用いた国語科の授業を構想することによって、学習者の国語学習に対する興味・関心、および学習意欲を喚起する方略を探ること、そこに本研究の主眼が置かれることになる。それは「国語教育の戦略」とも称することができる方略である。そしてすべて具体的な授業実践に即した考察を試みるところに、本研究の特色がある。なお論文の中で紹介する授業は、その多くがわたくし自身の中学校と高等学校、さらに大学における実践に基づいている。本研究ではそれらの実践の記述の中から、帰納的に国語教育の理論が立ち現れるように留意する。